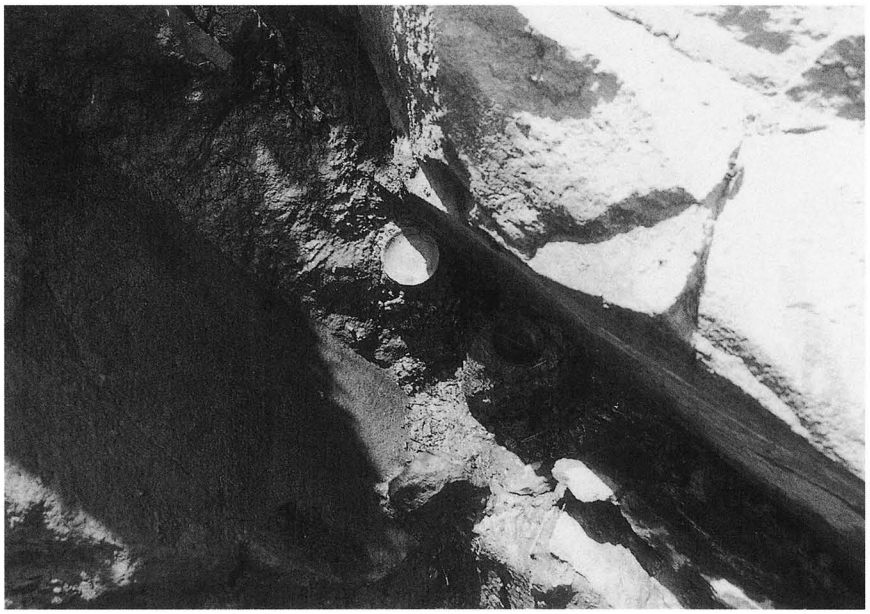
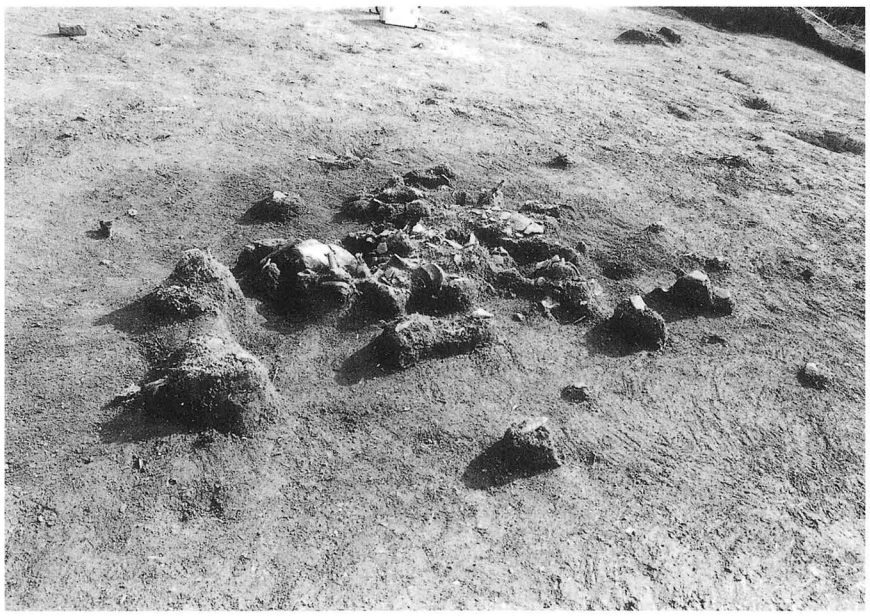
図版5

大岩北側石組み

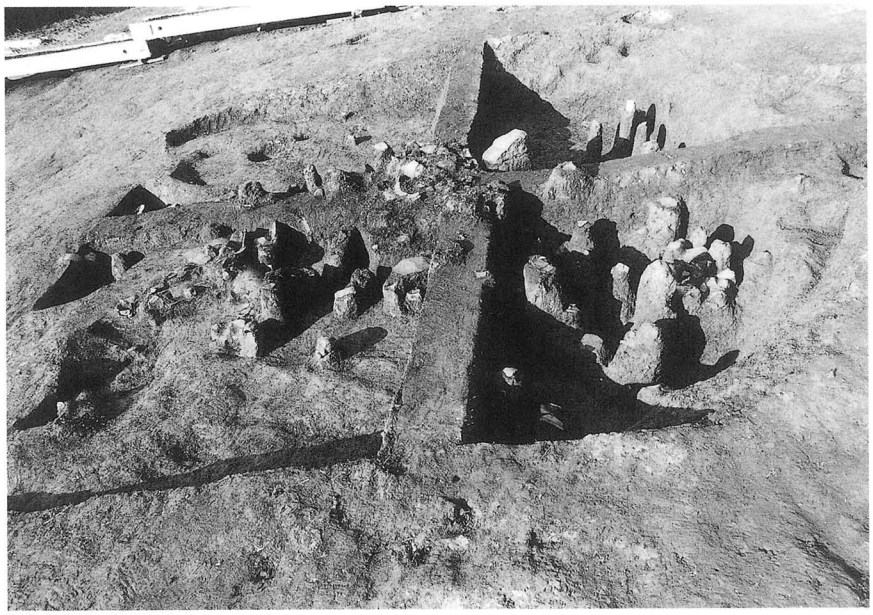


大岩東側遺物出土状況

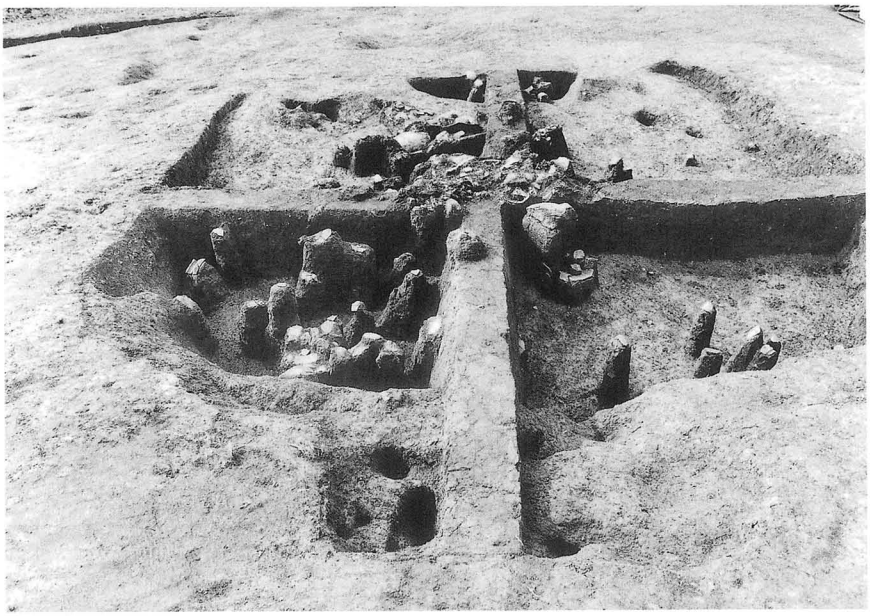


ＳＩ01検出状況

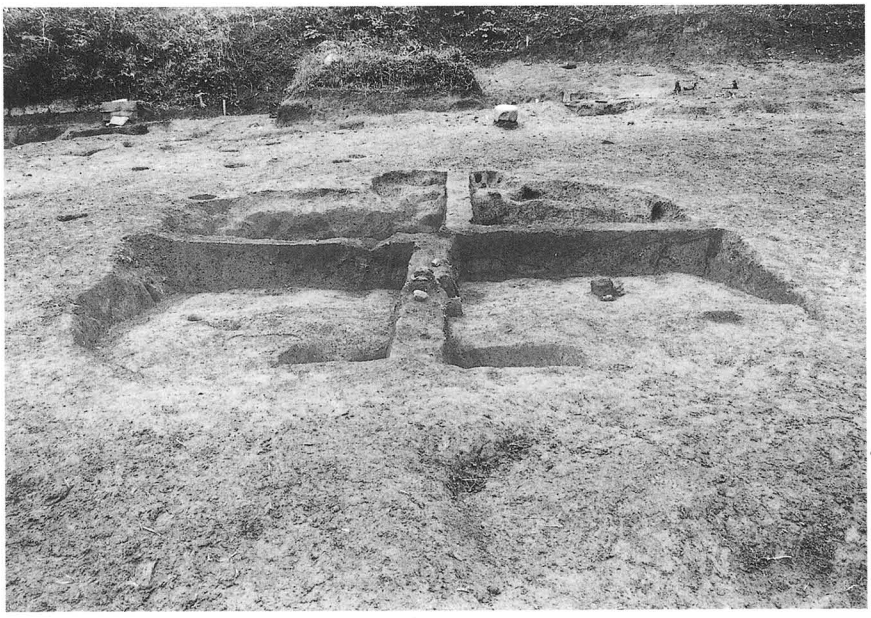
図版6



ＳＩ01遺物出土状況
（南より）



ＳＩ01遺物出土状況
（東より）



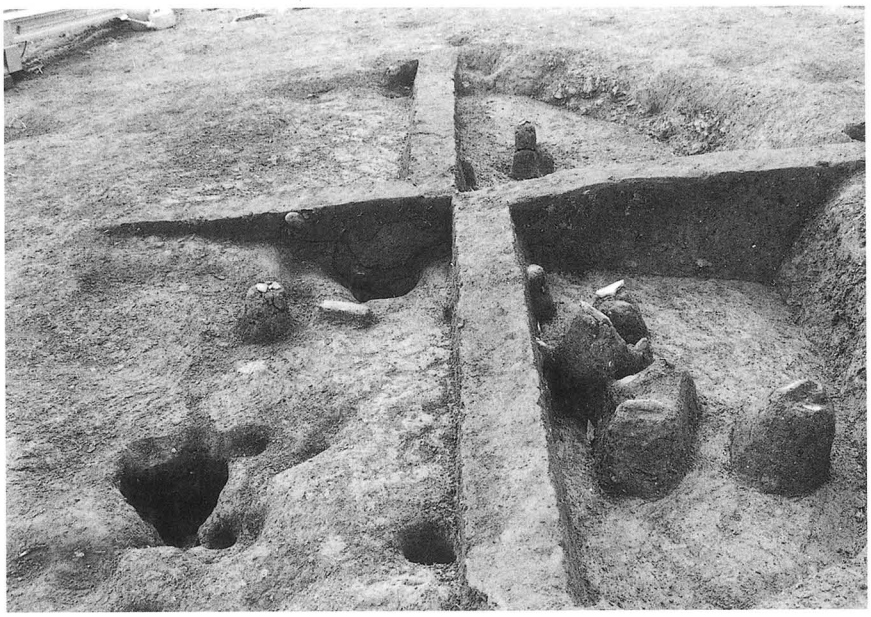
ＳＩ01南北土層断面

ＳＩ01甑形土器出土状況

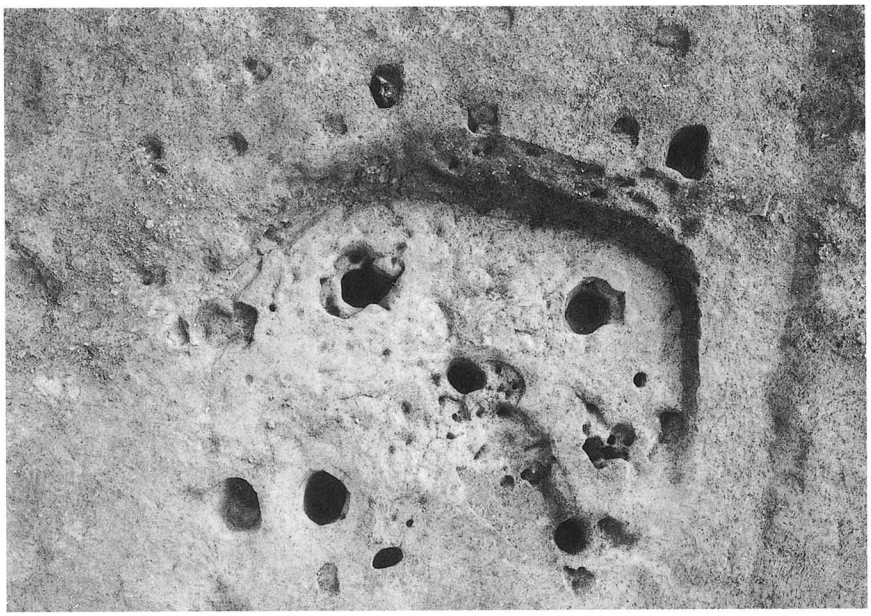
ＳＩ01貯蔵穴遺物出土状況

ＳＩ01完掘状況

図版8



ＳＩ02遺物出土状況

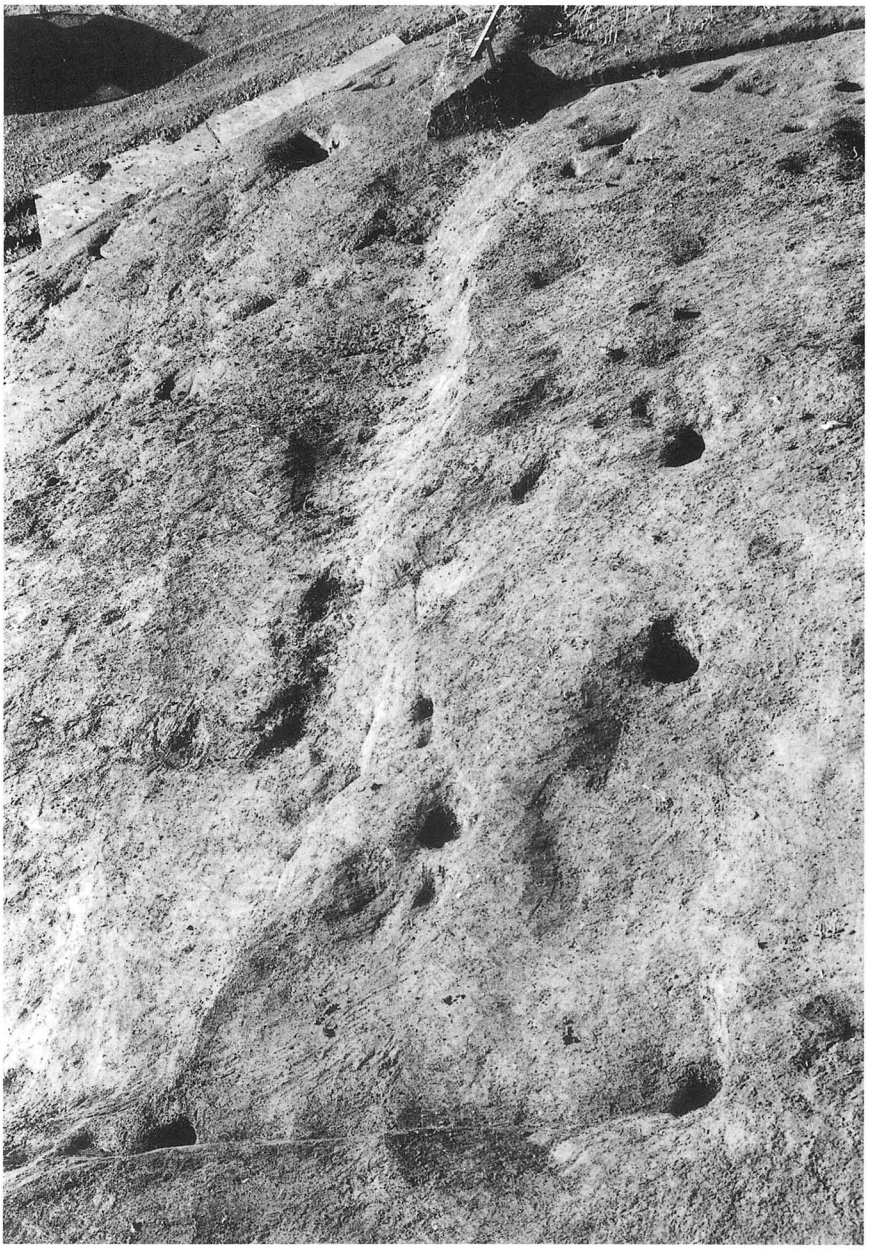


ＳＩ02完掘状況

ＳＩ03完掘状況

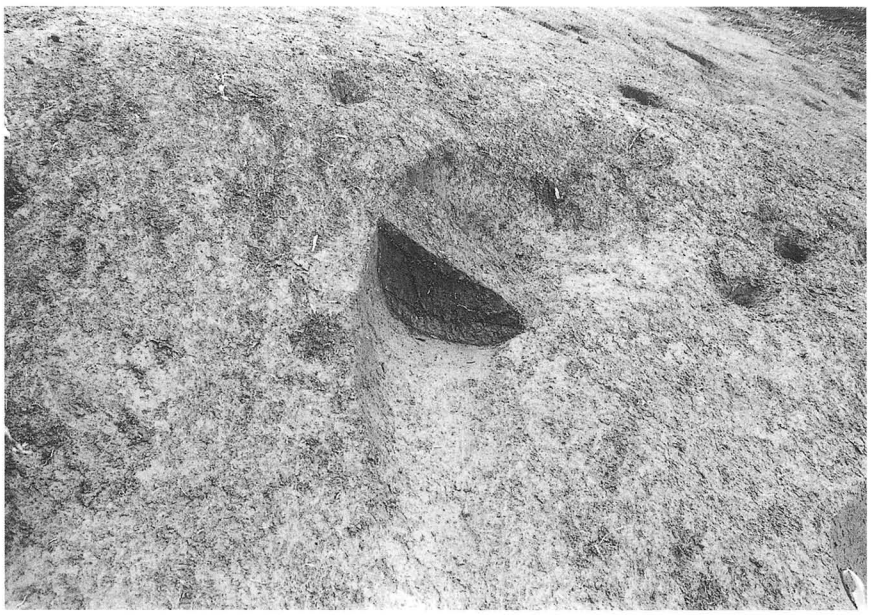
図版9

加工段05完掘状況



ＳＩ05完掘状況

図版10

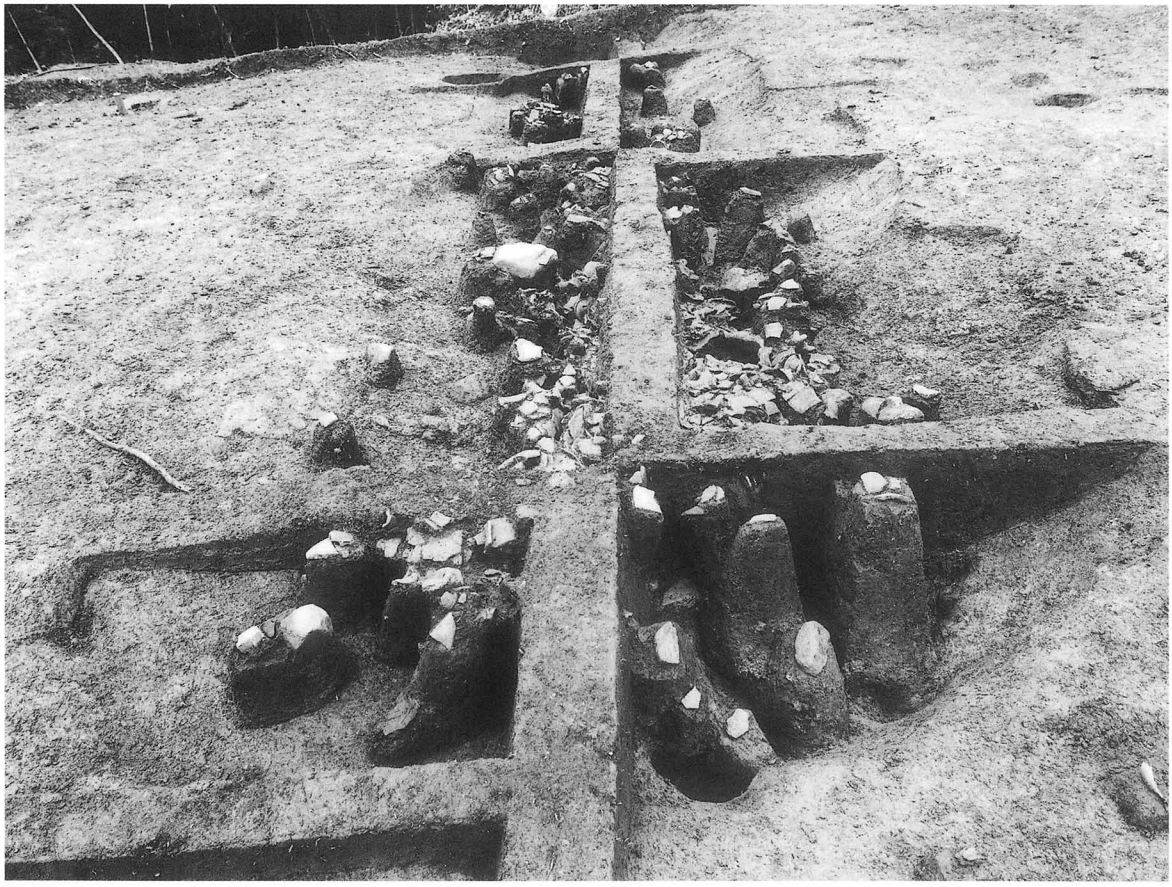


ＳＩ04
（セクションを残した状況）

ＳＸ01完掘状況

加工段01調査風景

加工段01遺物出土状況



加工段01遺物出土状況

図版12

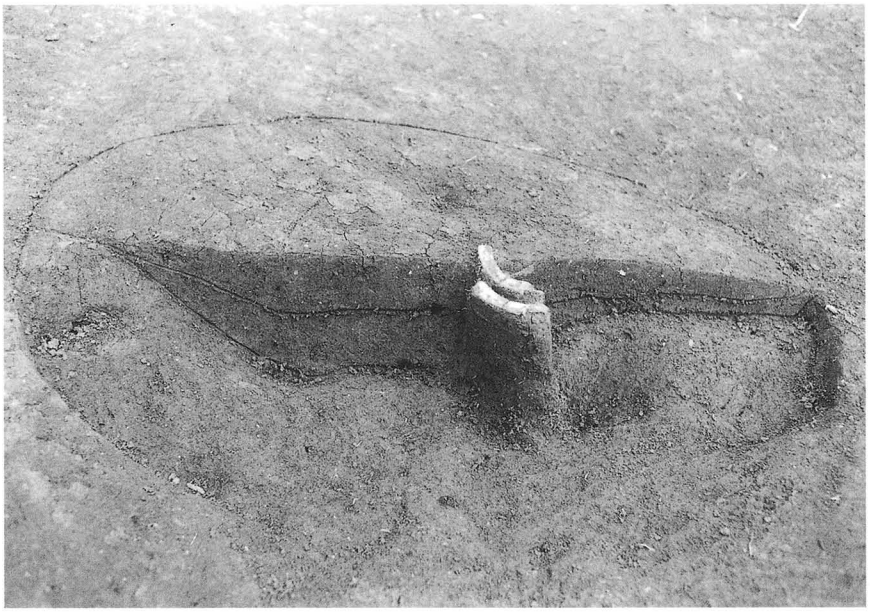
加工段01遺物出土状況

加工段01完掘状況

調査区東側黒色土層検出状況

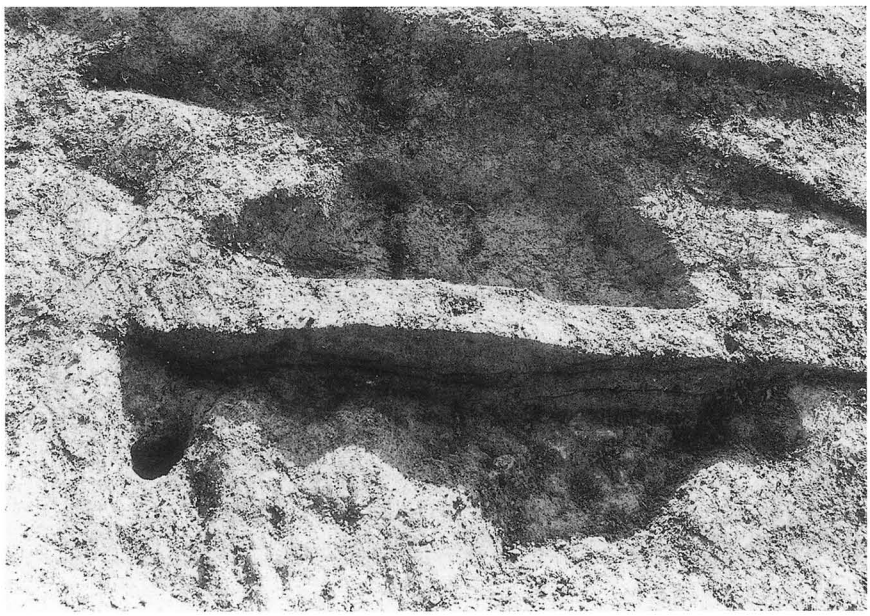
加工段03・04（セクションを残した状況）

図版14



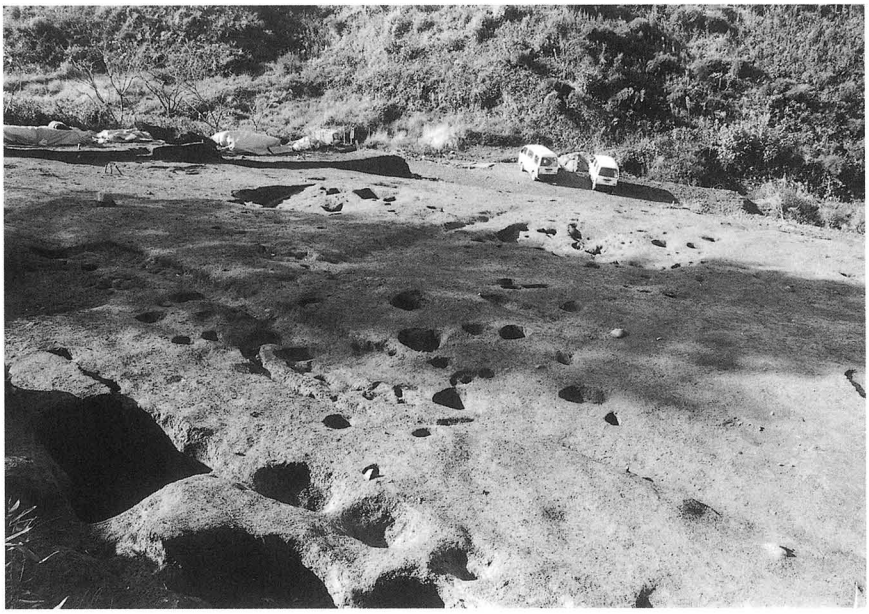
ＳＫ01遺物出土状況

ＳＫ02遺物出土状況

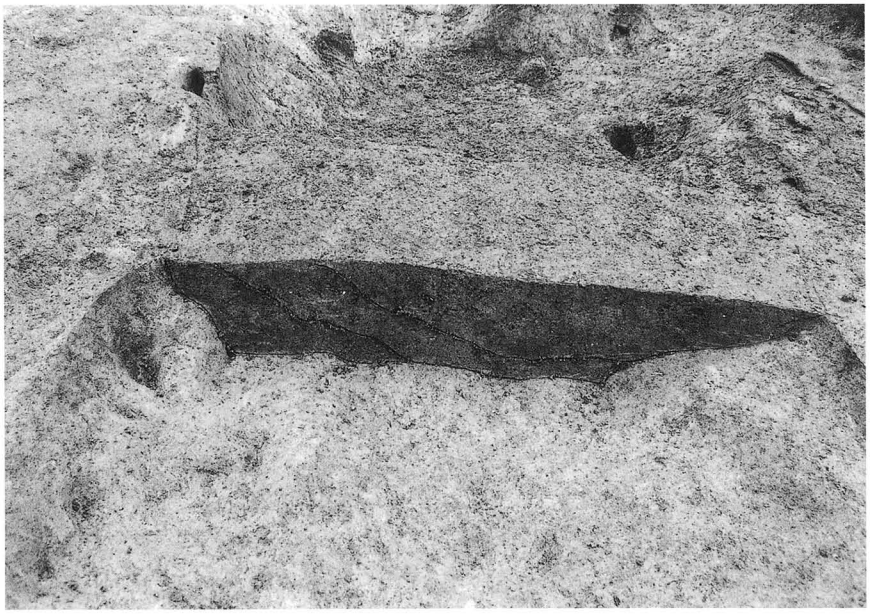


ＳＫ05土層断面

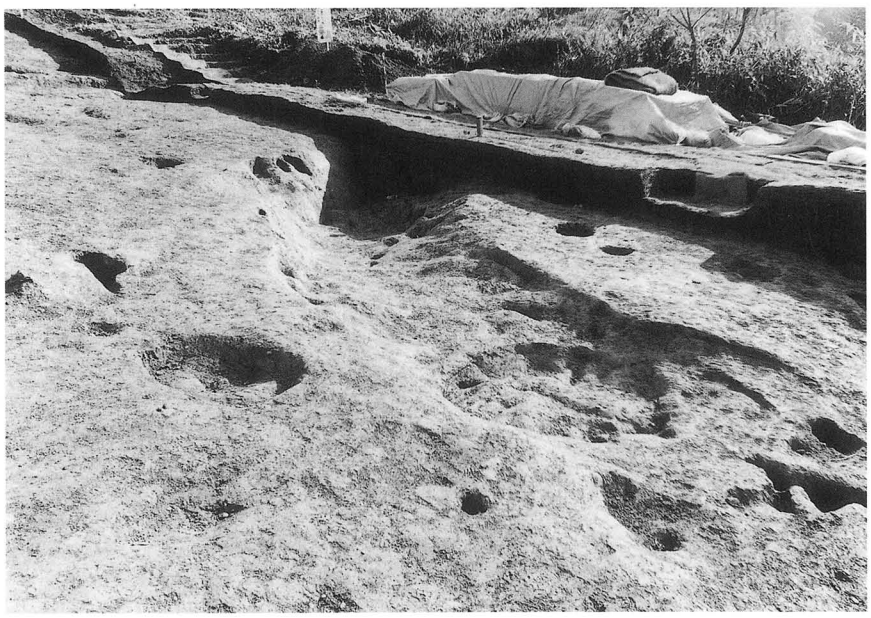
図版15



ＳＤ01完掘状況

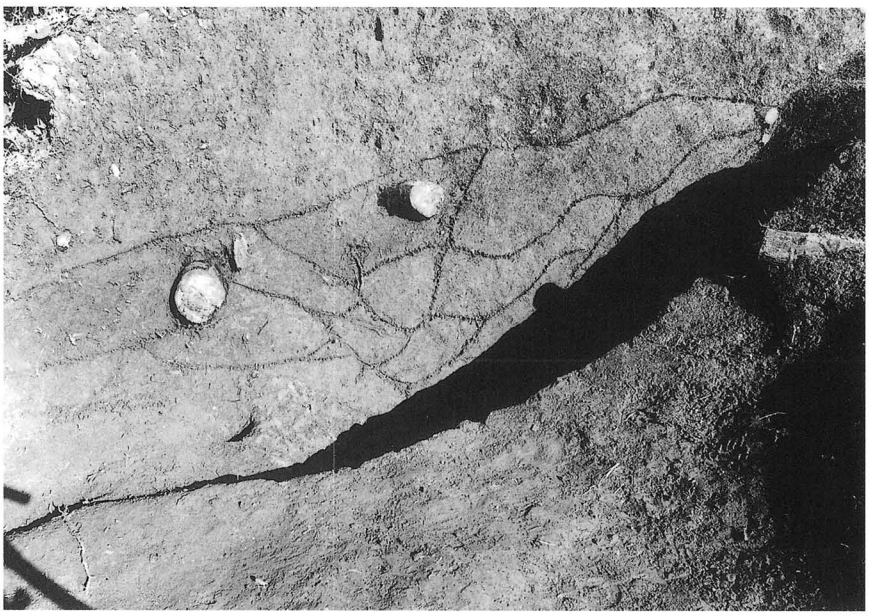


ＳＤ03土層断面



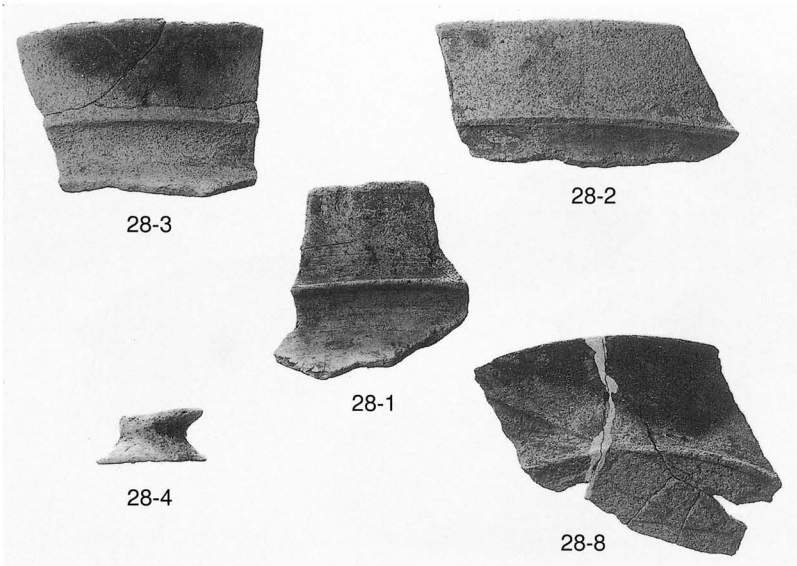
ＳＤ03完掘状況

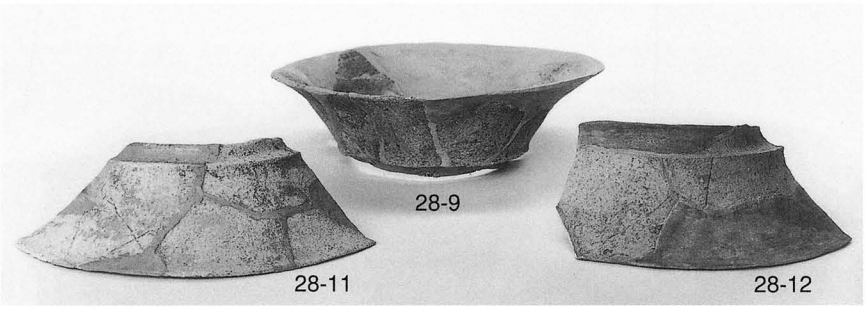
図版16



ＳＤ02土層断面

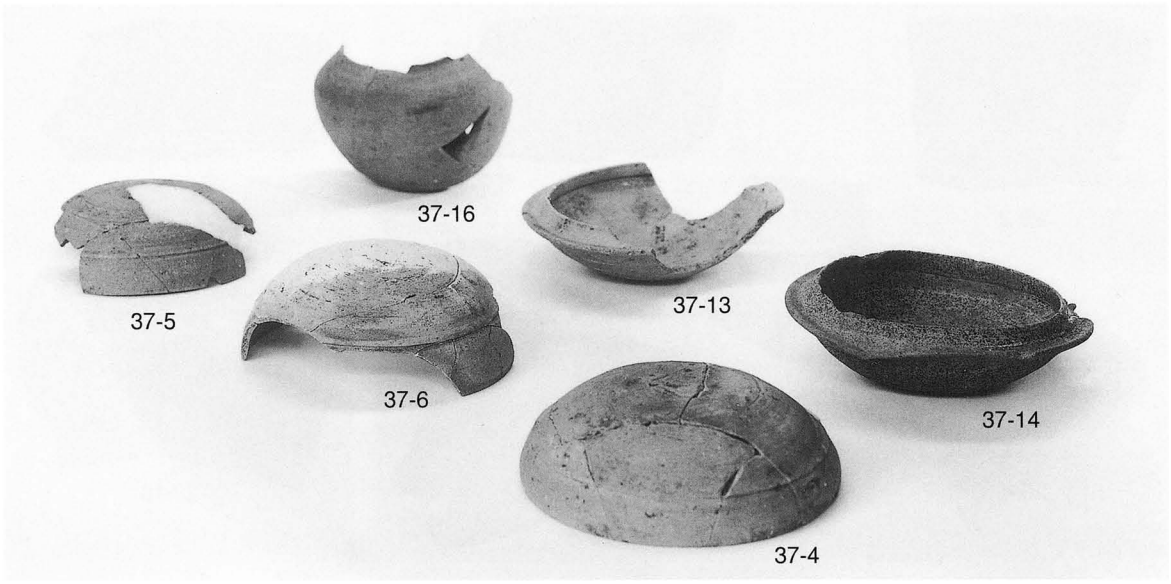
ＳＤ02遺物出土状況



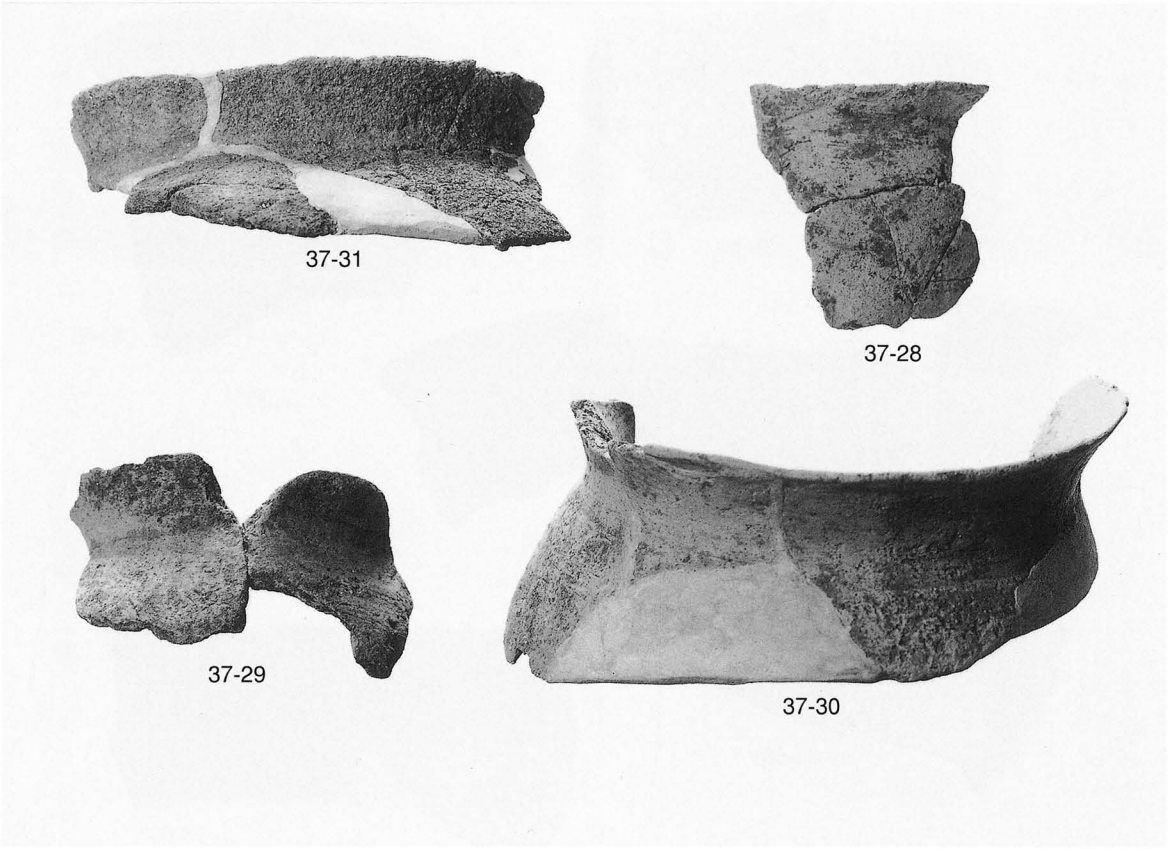


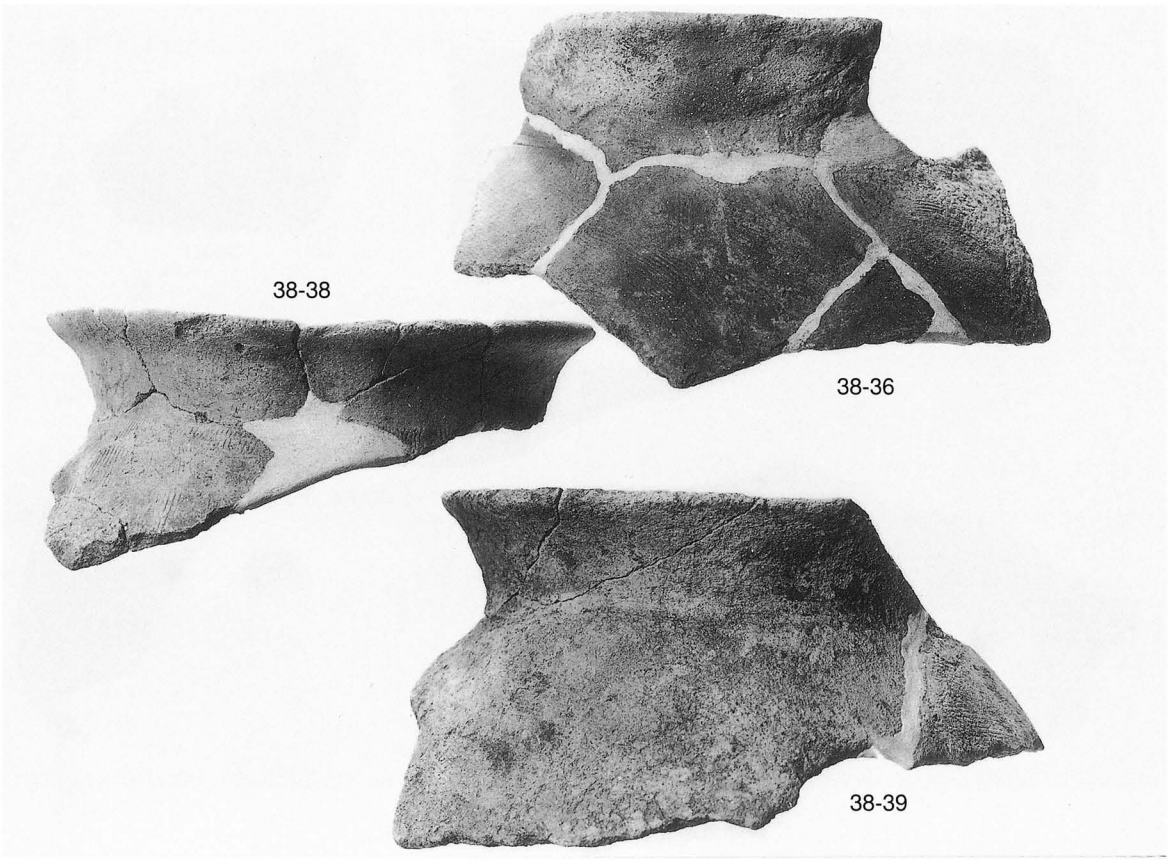
長廻遺跡Ⅱ区ＳＩ01出土遺物

図版18



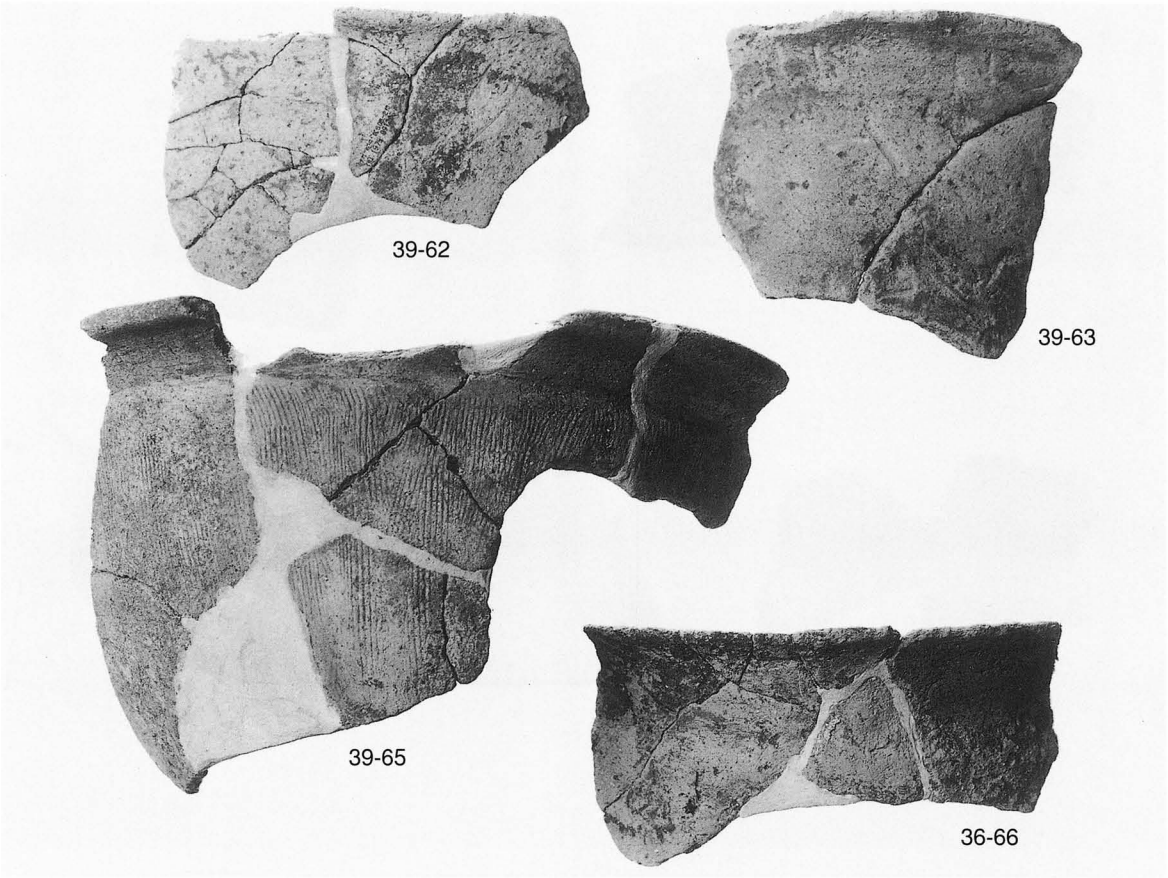
長廻遺跡Ⅱ区加工段01出土遺物（1）





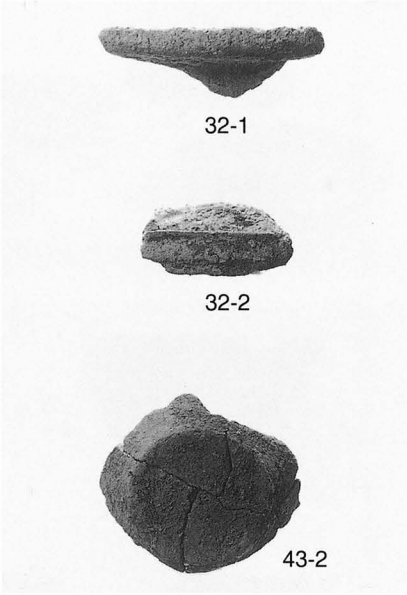
長廻遺跡Ⅱ区加工段01出土遺物（2）

図版20



長廻遺跡Ⅱ区加工段01出土遺物（3）

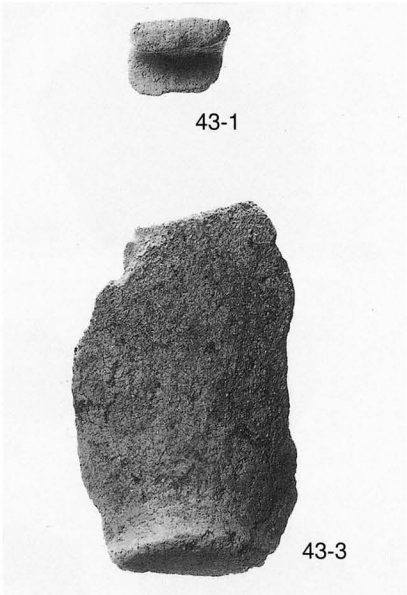
37-32


32-1

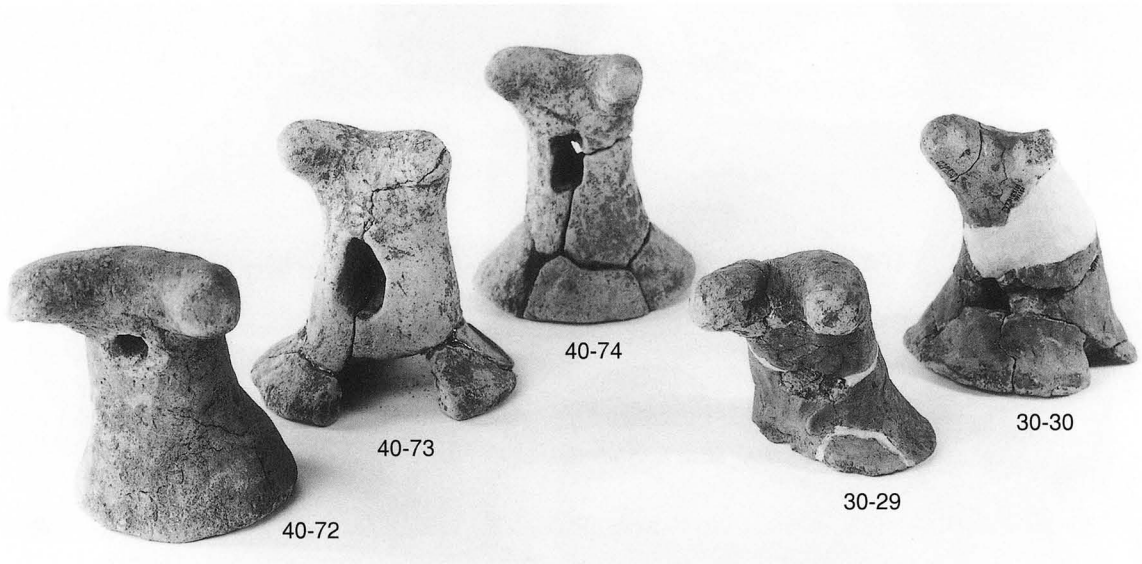
32-2

43-2

41-81


43-1

43-3


40-74

40-73

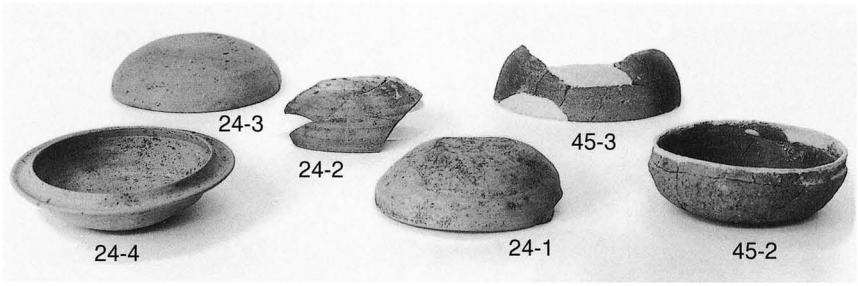
40-72

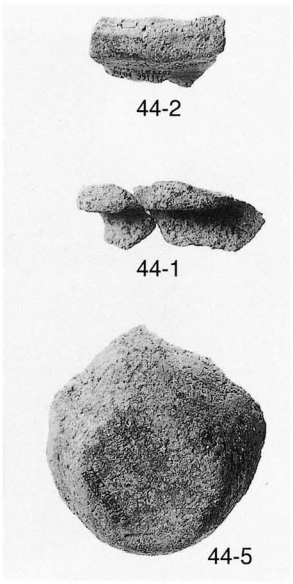
30-30

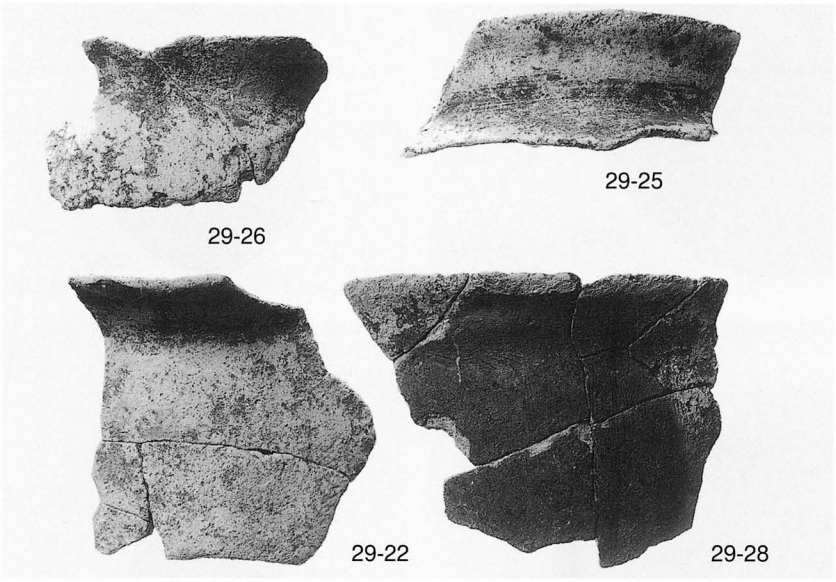
30-29

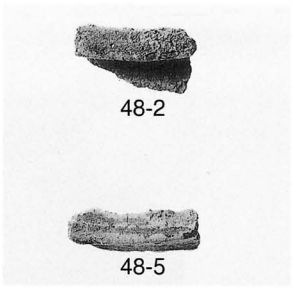
長廻遺跡Ⅱ区加工段01（4）・ＳＩ01・ＳＩ03・加工段03出土遺物

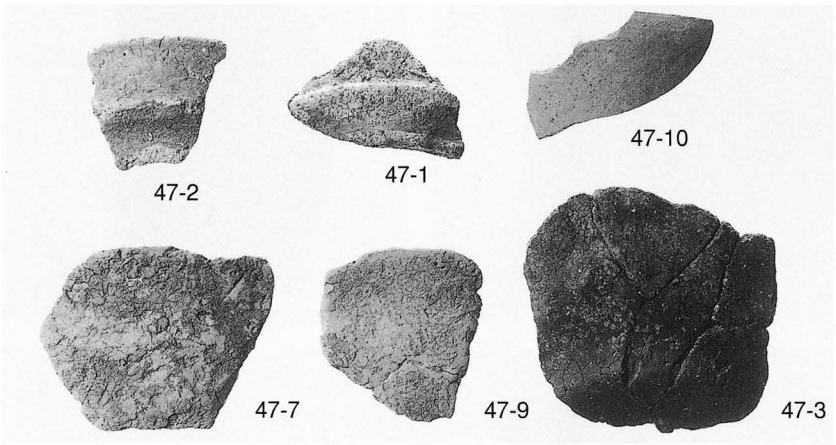
図版22

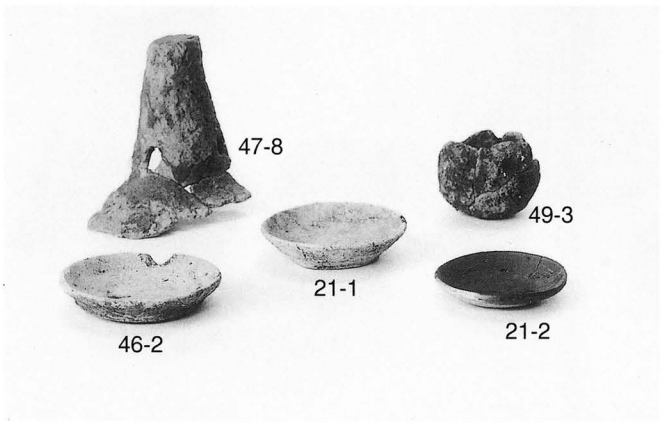


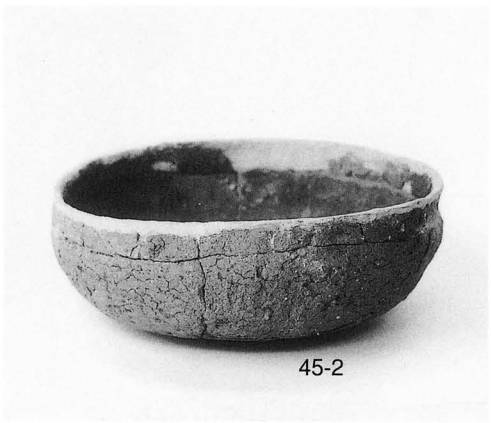




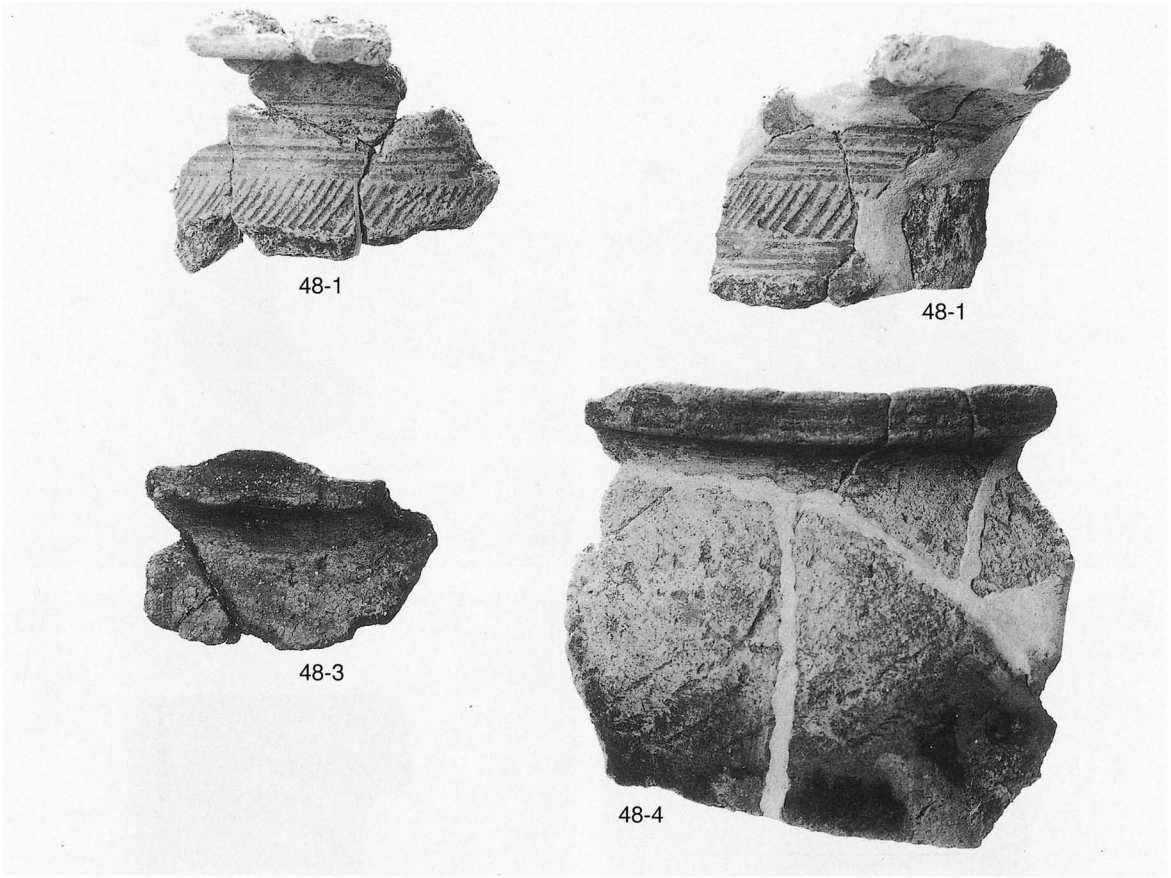


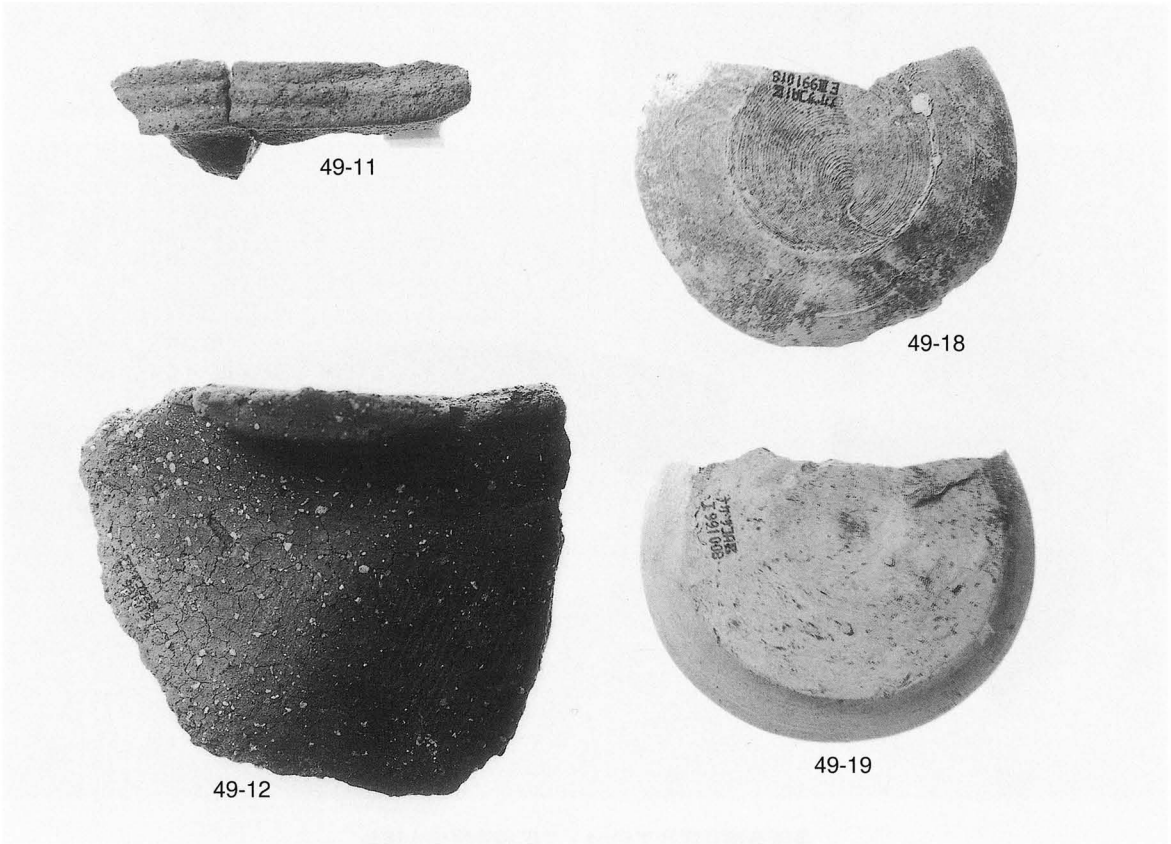






長廻遺跡Ⅰ区大岩・Ⅱ区ＳＸ01・ＳＩ01・加工段05，ＳＫ02・03・ＳＤ01・02・03出土遺物

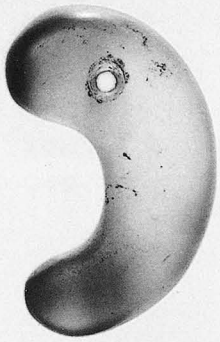




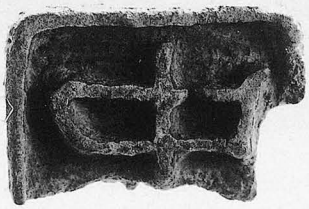
長廻遺跡Ⅱ区ＳＤ03・調査区出土遺物

図版24

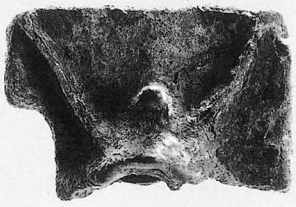
50-2



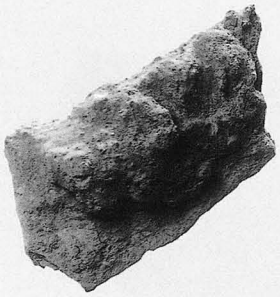
50-1

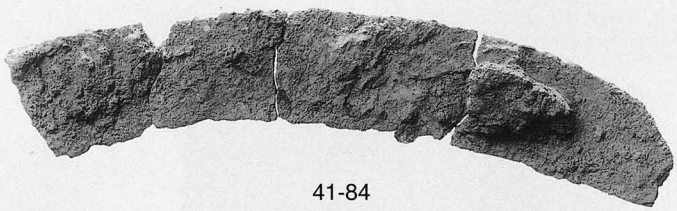


50-3



50-3





41-84

長廻遺跡Ⅱ区加工段01・Ⅱ区調査区出土遺物

第５章　自然科学的分析

出雲市長廻遺跡出土銅印の非破壊分析結果について

国立歴史民俗博物館情報資料研究部　永嶋正春

出雲市長廻遺跡出土銅印の非破壊分析結果について

国立歴史民俗博物館情報資料研究部　永　嶋　正　春

はじめに

標記の遺跡から出土した銅印１点について非破壊的な分析調査を実施したので、その結果を要約して報告する。

本遺跡からは弥生時代、古墳時代の遺構が検出されているが、銅印そのものは表土直下からの出土であり、時代を確実に推定するための遺構・遺物を伴ってはおらず、銅印そのものの有する情報から時代比定すべき事情にある。筆者はかねてより古代を中心とした出土・伝世銅印について網羅的な非破壊分析調査を実施してきており、その結果として、概ね古代（奈良・平安時代）の銅印であるのか、近世あるいは近世以降のものであるのかを識別している。本銅印は、その外観形態からしてすなおに古代のものであるというのにはためらわれる事情にあり、したがって筆者の実施している常法に則って分析調査を実施し、その結果をも加味して資料評価をすることが有効であると考えられる。

以上の判断に基づき、次の３つの調査を実施した。

・蛍光Ｘ線分析
・Ｘ線透過検査
・密度測定

調査方法の内容、意味合いなどについては文末の参考欄に掲げた文献等を参考にしていただくとして、ここではその結果の概略を報告する。

調査結果

蛍光Ｘ線分析結果

本銅印は、銅（Cu）、鉛（Pb）を主体とする青銅であるが、これに少量のヒ素（As）、亜鉛（Zn）、スズ（Sn）が加わることで構成されている。他に微少成分としては、アンチモン（Sb）、銀（Ag）などが認められるが、銀の存在量は目立ったものではなく、またビスマス（Bi）はほとんど検出されていない。

筆者がこれまでに実施している40例を越える銅印の分析結果でいえば、上記の成分内容は近世あるいはそれ以降の銅印の場合、よく見られるものであるが、古代に属する銅印でこの種の成分構成を持つものは皆無である。

Ｘ線透過像・密度

Ｘ線透過像としては、顕著な鬆の存在は認められず、また細かな鬆についても確認し難い。すなわち十分稠密に鋳造された銅印と判断できる。

銅印の質量は、現況で10.5609g、密度は7.71g/cm³である。近世あるいは近世以降の印の密度は、通常では8g/cm³以上の値を示すことからすれば小さな値と言えるが、測定例のほとんどすべてが伝世ないしそれに近い状況のものであることを考慮すべきであろう。本銅印は錆の生成状況からみて相当期間土中に埋没していたことは確かであり、そのための成分の溶脱、表面部の錆化、土等の付着はすべて密度を軽減する方向に働く。このこととX線透過像の状況とを勘案すれば、銅印の当初の密度が8g/cm³であったと想定することはさほど困難ではない。

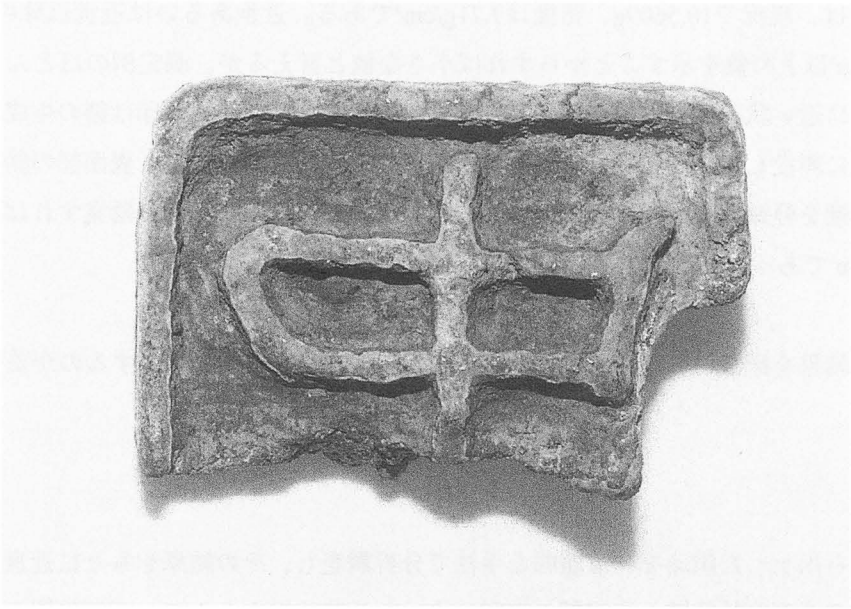
以上の調査結果を総合的に判断すると、本出土銅印は近世のものと判断するのが妥当である。

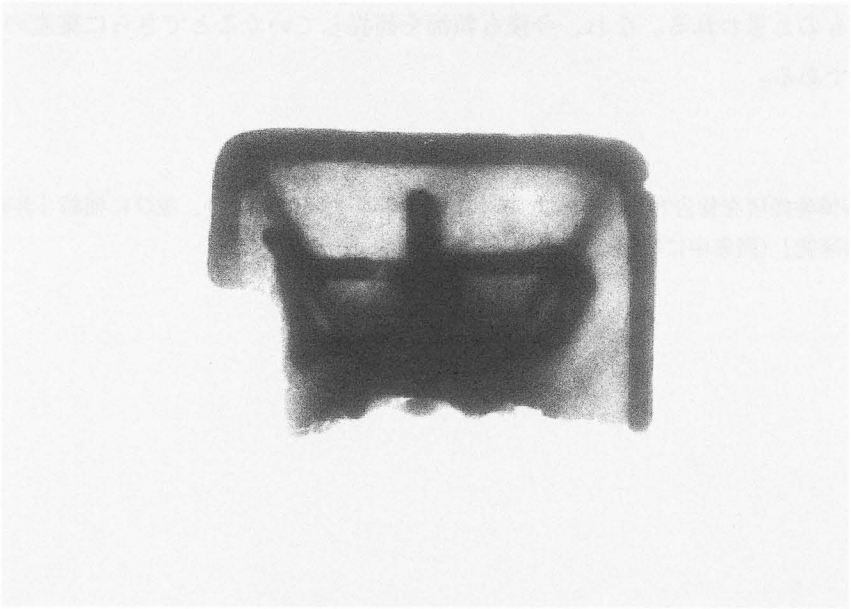
おわりに

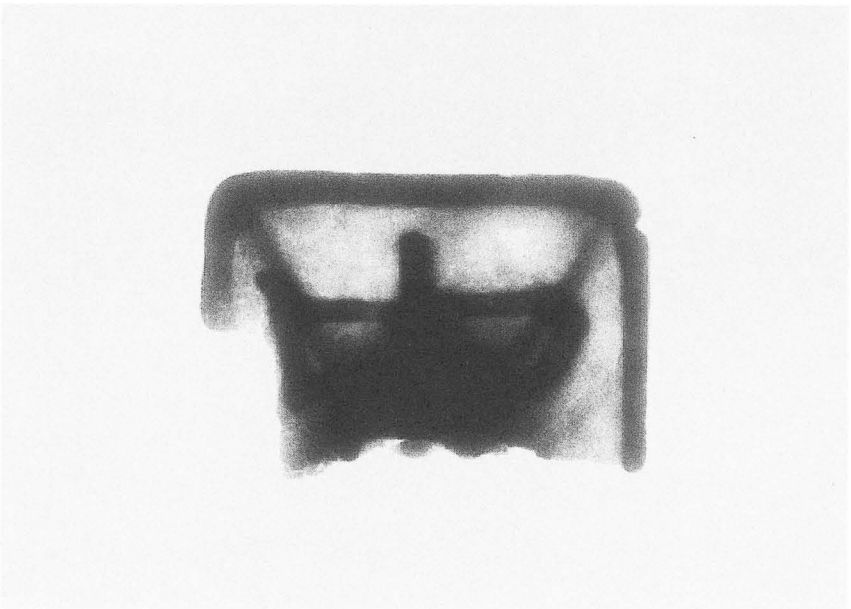
標記遺跡から出土した銅印を非破壊的な手法で分析調査し、その結果をもとに近世に属する銅印と判断した。その形態的特徴と江戸期の銅印にまつわる諸状況からみて、江戸後期のものとみてほぼ間違いないものと思われる。なお、今後も類例を捕捉していくことでさらに確度の高い議論をすることも必要である。

参考

国立歴史民俗博物館研究報告79集『日本古代印の基礎的研究』1999年3月、並びに拙稿「非破壊的手法による銅印の科学的研究」（同書中に収載）







報告書抄録

フリガナ	ナガサコヨコアナボグン、ナガサコイセキ
書名	長廻横穴墓群、長廻遺跡（Vol.1）
シリーズ名	斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	XIII
編著者名	伊藤　智、平石　充
編集機関	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
所在地	〒690-0131　島根県松江市打出町33番地　TEL0852 36-8608（代）
発行年月日	2001年3月30日

所収遺跡名（フリガナ）	所在地（フリガナ）	調査期間	北緯	東経	調査面積	調査原因
長廻横穴墓群（ながさこよこあなぼぐん）	島根県（しまねけん） 出雲市（いずもし） 大津町（おおつちょう）	H12.4.17 ｜ H12.9.29	35°20′57″	132°47′18″	6,310m²	放水路建設
長廻遺跡（ながさこいせき）	島根県（しまねけん） 出雲市（いずもし） 大津町（おおつちょう）	H11.5.20 ｜ H11.12.15	35°20′54″	132°47′19″	800m²	放水路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長廻横穴墓群	横穴墓	古墳時代後期 近世	横穴墓	土師質土器 陶磁器	
長廻遺跡	集落跡	弥生時代中期～後期 弥生時代終末～古墳時代初頭	竪穴建物　5 土坑　5 溝　3 大岩　1	弥生土器 土師器 須恵器 鎌・銅印	近世の擬古印出土

斐伊川放水路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書XIII

長廻横穴墓群・長廻遺跡(Vol.1)

2001年3月発行

発行　島根県教育委員会
　　国土交通省出雲工事事務所

編集　島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
　　〒690-0131　島根県松江市打出町36
　　TEL 0852-36-8608
　　http://www.pref.shimane.jp/section/maibun/

印刷　綜合印刷株式会社